事例３　「人虎伝」との読み比べを通して「山月記」を読み深める

１　育成を目指す言語能力

本単元は、文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうという言語能力を育成するために計画したものである。学習指導要領の「現代文」の指導事項「イ　文学的な文章について、人物、情景、心情などを的確にとらえ、表現を味わうこと。」や、「ウ　様々な文章を読むことを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりすること。」を指導の中心に取り上げ、「文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わっている。」「様々な文章を読んで、表現の意図や特色をとらえようとしたり、心情を豊かにし、思考力を育て、人間、社会、自然などに対して自分なりの考えをもとうとしたりしている。」という評価規準を中心にして評価する。言語活動例の「イ　文学的な文章を読んで、人物の生き方やその表現の仕方などについて話し合うこと。」や「ウ　文章の理解を深め、興味・関心を広げるために、関連する文章を読んだり創作的な活動を行ったりすること。」を参考に、「文章を読み比べる」、「自分の考えを文章にまとめる」という言語活動を通して、前述した能力を育成する。

この実践は、「読書へのアニマシオン」の手法を取り入れることで、生徒の主体的な学習活動を促し、素材文の表現を味わうとともに、作品を通して自分なりの考えを深める学習活動を展開したものである。

２　学習活動の概要

(1) 単元名　小説「山月記」（中島敦）

(2) 単元の目標

①様々な文章を読んで、表現の意図や特色をとらえようとしたり、心情を豊かにし、思考力を育て、人間、社会、自然などに対して自分なりの考えをもとうとする態度を身に付ける。（関心・意欲・態度）

②文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わう。（読む能力）

③様々な文章を読むことで、書き手の主張や文章の内容をとらえ、共感、疑問、思索などを通して思考力を高め、自分なりの考えを深める。（読む能力）

④語句について、その意味や文脈の中での使い方を理解する。（知識・理解）

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
①「人虎伝」と「山月記」を読み比べて、表現の意図や特色をとらえようとしたり、心情を豊かにし、思考力を育て、人間、社会、自然などに対して自分なりの考えをもとうとしたりしている。	①文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わっている。 ②「人虎伝」と「山月記」を読み比べて、書き手の主張や文章の内容をとらえ、共感、疑問、思索などを通して思考力を高め、自分なりの考えを深めている。	①語句の意味・用法を理解し、語彙を豊かにしている。

(4) 指導と評価の計画(8時間)

時間	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1	**作品の全体像の把握**		
	⑴「山月記」の朗読テープを聞く。	○作品冒頭に頻出する難解な漢語には拘泥せずに、作品の全容を把握するよう、留意させる。	
	⑵本文の中の印象に残った一文について批評する。	○各自に印象に残った一文をあげ、それについての批評を書くように指示する。	**知識・理解①** （用紙への記述の確認）
2 〜 5	**本文の内容理解**		
	⑴「第１時の⑵」での学習活動の結果を踏まえながら、本文を読解する。	○「第１時の⑵」で生徒があげてきた一文への批評を随時とりあげながら、読解させていく。 ○難しい語彙は随時辞書で確認させ、本文を的確に理解させる。	**読む能力①** （授業時の観察） **知識・理解①** （授業時の観察）
6 〜 8	**作品についての思索**		
	⑴「山月記」のあらすじを整理する。資料１	○第２時〜第５時での復習と整理を兼ねるため、教科書を見ないで数分で行わせる。	**読む能力①** （ワークシート資料1への記述の確認）
	⑵「人虎伝」のあらすじを整理する。資料１、資料２	○指導書より「人虎伝」の書き下し文資料２をプリントして配付する。独力で読み進めることができない生徒には、隣席の生徒とペアで読ませる。また、生徒の状況に応じて、書き下し文ではなく口語訳を示して読ませる。	**読む能力①** （ワークシート資料1への記述の確認）
	⑶「山月記」と「人虎伝」のあらすじの相違点を確認し、二次的創作によって「山月記」にどのような効果が見られるかを考える。	○「山月記」と「人虎伝」とでは、話題の序列に相違があり、また、叙述された内容（表現）にも相違があることに気付かせる。 ○考えを用紙に記述させる。	**読む能力②** （用紙への記述の確認）
	⑷一人一人の考えをクラスで交流して読み深める。	○⑶の学習活動の中で生徒の書いたものを教師が数編選び、印刷して配付し資料として使う。この資料から考えたことを、用紙に自由に記述させる。（生徒の状況に応じては、話し合わせてもよい。）	**読む能力②** （用紙への記述の確認）

※「関心・意欲・態度」は単元全体を通して評価する。

3　評価の例

本単元の中心となる目標は、「様々な文章を読んで、表現の意図や特色をとらえようとしたり、心情を豊かにし、思考力を育て、人間、社会、自然などに対して自分なりの考えをもとうとする態度を身に付ける」ことであり、その学習場面での生徒の主体的な活動を促すために、「文章を読み比べる」、「自分の考えを文章にまとめる」という言語活動を、「読書へのアニマシオン」の手法を参考にしながら取り入れた。

資料１を用いた「文章を読み比べる」学習では、ほとんどの生徒が「山月記」と「人虎伝」のそれぞれのあらすじをきちんと把握して、次のように正しく並べ替えることができ、「十分満足できる」と判断される状況であった。そして、この成果を第６時⑵での学習活動の土台とすることができていた。

資料１のワークシートの解答
問１（F）→（B）→（G）→（E）→（A）→（I）→（D）→（H）
問２（F）→（B）→（G）→（C）→（D）→（E）→（A）→（H）

「自分の考えを文章にまとめる」という言語活動においては、「山月記」と「人虎伝」とを読み比べ、あらすじや設定の相違点が生みだす効果を考えることを通して、「山月記」という作品の抱えるテーマに迫ることができた。（「十分満足できる」と判断される生徒の作品例資料３、資料４）

4　成果と課題

⑴ 成果

この実践は「文章を読み比べる」、「自分の考えを文章にまとめる」という言語活動を取り入れることによって、表現に即して読み味わうという言語能力を育成するために計画したものである。「人虎伝」と読み比べることによって、生徒は資料３、資料４のように自分なりに作品に対する考えを深め、「山月記」が持つテーマに迫ることができた。

また、この実践では、「素材文の表現を味わい、作品を通して自己の見方を深める」学習活動の場面において、生徒の主体的な活動を促すために、「読書へのアニマシオン」の手法を参考にしながら以下のような学習活動を取り入れた。

学　習　活　動	参考にした「読書へのアニマシオン」の作戦
第１時の⑵　各自が印象に残った一文をあげ、それについての批評を書く。	作戦40「私はこう考える」
第６時の⑴　「山月記」のあらすじを整理する。	作戦12「前かな後ろかな」
第６時の⑵　「人虎伝」のあらすじを整理する。	作戦16「それぞれのタイトルをあるべき場所に」

上記の３つの学習活動では、「読書へのアニマシオン」のもっているゲーム的な手法を生かして、生徒の主体的な学習活動を促すことを意図した。

今回の実践では、「人虎伝」は書き下し文で配付した。通常の読み比べの学習活動では、読み比べる文章を配付して、生徒一人一人に比較をさせるわけだが、ややもすればその学習活動にお

いて、学習意欲を持続できない生徒は受け身になりがちである。しかし、今回はゲーム的要素をもつ第６時の⑴、⑵のような段階を設けることによって、生徒の主体的な学習活動を促すことができた。

「読書へのアニマシオン」の手法を、学習のねらいに応じて取り入れることは、「様々な文章を読むことで、書き手の主張や文章の内容をとらえ、共感、疑問、思索などを通して思考力を高め、自分なりの考えを深める」ことを目指した学習場面において、生徒の主体的な活動を促す一助となるものである。

⑵ 課題

「読書へのアニマシオン」そのものを授業で行うには、時間や参加者等に制約が生ずることが想定されるが、その手法を生かした学習指導は可能である。他にどのような学習素材に応用することができるか、特に評論文や古典において、新しい教材研究の視座になると考える。

使用教科書

・『現代文１』東京書籍

参考文献

・モンセラ・サルト著『読書へのアニマシオン　75の作戦』柏書房
・『国訳漢文大成文学部第12巻　晋唐小説』 国民文庫刊行会

参考ＵＲＴ

・http://www.geocities.jp/sybrma/123jinkoden.kokuyakubon.html

資料1

あらすじのとおりに並べ替えよう

（　　）組（　　）番　氏名（　　）

A　自分がなぜ虎になったのかを李徵が語る。

B　袁慘が人食い虎（李徵）に会い、その後久闊を叙す。

C　袁慘は空腹の李徵に食料の提供を申し出る。

D　李徵が袁慘に妻子のことを頼む。

E　李徵が袁慘に詩の伝録を頼む。

F　李徵の経歴と失踪までの概略。

G　李徵が、虎に変身した夜の出来事と、虎としての経験について袁慘に語り、自己の運命を嘆く。

H　李徵と別れた袁慘が、咆哮する虎を見る。

I　李徵が空費した過去を悲しむ。

問1　右のA～Iを、「山月記」のあらすじのとおりに並べ替えなさい。ただし、右の中には、あらすじとは関係ない文が紛れ込んでいるので、それは使わないこと。

（　　）→（　　）→（　　）→（　　）→（　　）→（　　）→（　　）→（　　）

問2　右のA～Iを、「人虎伝」のあらすじのとおりに並べ替えなさい。ただし、右の中には、あらすじとは関係ない文が紛れ込んでいるので、それは使わないこと。

（　　）→（　　）→（　　）→（　　）→（　　）→（　　）→（　　）→（　　）

李景亮「人虎伝」書き下し文（『国訳漢文大成』による）

隴西の李徵は皇族の子にして、虢略に家す。徵少くして博学、善く文を属す。弱冠州府貢に従ふ。時に名士と号す。天宝十五載春、尚書右丞楊元の榜下に於いて進士に登第す。後数年、調せられて江南尉に補す。徵性疎逸、才を恃んで倨傲なり。跡を卑僚に屈する能はず。嘗に鬱鬱として楽しまず。同舎の会既に酣なる毎に顧みて其の群官に謂つて曰はく、生は乃ち君等と伍を為さんやと。其の寮友咸な之に側目す。謝秩に及び則ち退き帰りて間適し、人と通ぜざること歳余に近し。後衣食に迫られ乃ち東呉楚の間に遊び、以つて郡国の長吏に干む。楚人其の声を聞くこと固より久し。至るに及び皆館を開いて以つて之を俟つ。宴遊歓を極めて将に去らんとすれば、悉く厚く遺りて以つて其の嚢橐を実す。徵呉楚に在り且に歳余ならんとす。獲る所の饋遺甚だ多し。西虢略に帰り未だ舎に至らず。汝墳逆旅の中に於いて忽ち疾を被りて発狂し、僕者を鞭捶つ。其の苦に勝へず。是に於いて旬余疾益々甚だし。何もなく夜狂走し其の適く所を知らず。家僮其の去を跡ねて之を伺ふ。月を尽くして徵見に回らず。是に於いて僕者其の乗馬を駆り其の嚢橐を挈へて遠く遁れ去る。

明年に至りて陳郡の袁傪、監察御史を以つて詔を奉じて嶺南に使し、伝に乗りて商於の界に至り、晨に将に去らんとす。其の駅吏白して曰はく、道に虎あり暴にして人を食ふ。故に此に途する者は昼にあらざれば敢へて進むなし。今尚ほ早し、願はくは且らく車を駐め、決して前むべからずと。傪怒りて曰はく、我は天子の使にして後騎極めて多し。山沢の獣能く害をなさんやと。遂に駕を命じて行く。去りて未だ一里を尽くさざるに果たして虎あり、草中より突りて出づ。傪驚くこと甚だし。俄に虎身を草中に匿し、人声に言つて曰はく、異なるかな幾んど我が故人を傷つけんとせりと。傪其の音を聆くに李徵なるものに似たり。傪昔徵と同じく進士の第に登り、分極めて深し。別れて年あり、忽ち其の語を聞き既に驚き且つ異んで測るなし。遂に問ひて曰はく、子を誰とかなす、豈に故人隴西子にあらずやと。虎呼吟すること数声、嗟泣する状のごとし。已にして傪に謂つて曰はく、我は李徵なりと。傪乃ち馬より下りて曰はく、君何に由りて此に至れる。且つ傪始め君と場屋を同うすること十余年、情好歓すること甚だしく、他友に愈れり。意はざりき吾れ先づ仕路に登らんとは、君亦継いで科選に捷つ。睽間言笑時を歴ること頗る久し。傾風結想、渇して飲を待つがごとし。幸ひに出でて使するに因り此に君に遇ふを得たり。而るに乃ち自ら草中に匿るるは、豈に故人疇昔の意ならんやと。虎曰はく、吾已に異類となる。使君吾が形を見れば、則ち且に畏怖して之を悪まん。何ぞ疇昔を之れ念ふに暇あらんや。然りと雖も君遽に去るなく、少しく款曲を尽くすを得ば乃ち我の幸なりと。傪曰はく、我素と兄を以つて故人に事ふ。願はくは拝礼を展べんと。乃ち再拝す。虎曰はく、我足下と別れてより音容曠阻すること且つ久し。僕夫恙なきを得たるか。官途淹留を致さざるか。今又何くにか適く。向者君二吏あり、駆りて前み、駅隷印嚢を挈へて以つて導くを見たり。庸ぞ御史となりて出で使するにあらざらんやと。傪曰はく、近者幸ひに御史の列に備るを得、今使を嶺南に奉ずと。虎曰はく、吾子文学を以つて身を立て、位朝序に登る、盛なりと謂ふべし。況んや憲台は清峻百揆を分糾す。聖明慎んで択び、尤も人に異なり。心に故人の此の地に居るを喜ぶ。甚だ賀すべしと。傪曰はく、往者吾執事と同年に名を成し、交契深密なること常友に異れり。声容間阻りてより去日流るるがごとし。風儀を想望して心目倶に断ゆ。意はざりき今日君が旧を念ふの言を獲んとは。然りと雖も執事何為れぞ我を見ずして自ら草木の中に匿るる。故人の分、豈に是くのごとくなるべけんやと。虎曰はく、我今人たらず、安くんぞ君を見るを得んやと。傪曰はく、願はくは其の事を詳らかにせんと。

虎曰はく、我が前身呉楚に客たり。去歳方に還る。道汝墳に次り忽ち疾に嬰りて発狂し、夜戸外に吾が名を呼ぶ者あるを聞く。遂に声に応じて出で山谷の間を走り、覚えず左右の手を以つて地を攫みて歩す。是れより心愈々狠、力愈々倍せるを覚ゆ。其の肱髀を視るに及びては則ち毛の生ぜるあり。心甚だ之を異とす。既にして溪に臨みて影を照せば已に虎と成れり。悲慟すること良久し。然れども尚ほ生物を攫みて食ふに忍びず。既に久しく飢ゑて忍ぶべからず。遂に山中の鹿豕獐兎を取りて食に充つ。又久しくして諸獣皆遠く避けて得る所なし。飢益々甚だし。一日婦人あり山下より過ぐ。時正に餉迫る。徘徊すること数四、自ら禁ずる能はず。遂に取りて食ふ。殊に甘美なるを覚ゆ。今其の首飾猶ほ巖石の下に在り。是れより冪して乗る者、徒して行く者、負ひて趨る者、翼ありて翔ける者、毛ありて馳する者を見

れば、力の及ぶ所悉く擒へて之を阻し、立ちどころに尽くす。率ね以つて常となす。妻孥を念ひ朋友を思はざるにあらざれども、ただ行の神祇に負けるを以つて、一旦化して異獣となり、人に靦づるあり。故に分として見えず。嗟乎我と君とは同年に登第し、交契素より厚し。君は今日天憲を執り親友に耀かす。而も我は身を林藪に匿し永く人寰を謝る。躍りて天を呼び俛して地に泣くも、身毀れて用ひられず。是れ果たして命なるかと。因つて呼吟咨嗟し殆ど自ら勝へず。遂に泣く。儕且つ問ひて曰はく、君今既に異類となる。何ぞ尚ほ能く人言するやと。虎曰はく、我今形変じて心悟むるのみ。此の地に居りてより歳月の多少を知らず、但だ草木の栄枯を見るのみ。近日絶えて過客なく、久しく飢ゑて堪へ難し。不幸にして故人に唐突し、慙惶すること殊に甚だしと。儕曰はく、君久しく飢うれば某に余馬一疋あり、留めて以つて贈となさば如何と。虎曰はく、吾が故人の俊乗を食ふは、何ぞ吾が故人を傷つくるに異ならんや。願はくは此れを反さんと。儕曰はく、食籃中に羊肉数斤あり、留めて以つて、贈となさば可ならんかと。曰はく、吾方に故人と旧を道ふ。未だ食ふに暇あらず。君去るとき則ち之を留めよと。又曰はく、我君と真に忘形の友なり、而して我将に託す所あらんとす、可ならんかと。儕曰はく、平昔の故人なり、安くんぞ不可なるあらんや。恨むらくは未だ何如事かを知らず、願はくは尽く之を教へよと。虎曰はく、君我に許さずんば我何ぞ敢へて言はん、君既に我に許せり、豈に隠すあらんや、初め我逆旅の中に於いて疾の為に発狂し、既に荒山に入る。而して僕者我が乗馬衣嚢を駆り悉く逃げ去る。吾が妻孥尚ほ號略に在り。豈に我が化して異類となれるを知らんや。君南より回らば為に書を齎して吾が妻子を訪ひ、ただ云へ、我れ已に死せりと。今日の事を言ふなかれ。之を志せと。乃ち曰はく、吾人世に於いて且つ資業なし。子あるも尚ほ稚し。固より自ら謀り難し。君の位周行に列り、素より風義を秉る。昔日の分、豈に他人能く右らんや。必ず望む、其の孤弱を念ひ、時に之を賑卹し、道途に殍死せしむるなくんば、亦恩の大なるものなりと。言ひ已りて又悲泣す。儕も亦泣いて曰はく、儕と足下と休戚同じ。然らば則ち足下の子は亦儕の子なり。当に力めて厚命に逼ふべし。又何ぞ其の至らざるを虞れんやと。

虎曰はく、我旧文数十篇あり。未だ代に行はれず。遺藁ありと雖も当に尽く散落すべし。君我が為に伝録せば、誠に文人の口閾に列する能はざるも、然も亦子孫に伝ふるを貴ぶなりと。儕即ち僕を呼び筆を命じ、其の口に隨つて書せしむ。二十章に近し。文甚だ高く、理甚だ遠し。閲して歎ずること再三に至る。虎曰はく、此れ吾が平生の業なり。又安くんぞ寝めて伝へざるを得んやと。既にして又曰はく、吾詩一篇を為らんと欲す。蓋し吾が外異なりと雖も、中異なる所なきを表せんと欲す。亦以つて吾が懐を道ひて吾が憤を攄べんと欲するなりと。儕復た吏に命じ筆を以つて之に授けしむ。詩に曰はく、

偶々狂疾に因つて殊類と成り、災患相仍りて逃るべからず。今日爪牙誰か敢へて敵せん。当時声跡共に相高し。我異物となる蓬茅の下、君已に軺に乗り気勢豪なり。此の夕溪山明月に対し、長嘯を成さずして但嘷るを成す。と。

儕之を覧て驚いて曰はく、君の才行我れ之を知れり。而も君の此に至れるは、君平生自ら恨むあるなきを得んやと。虎曰はく、二儀の物を造る、固より親疎厚薄の間なし。其の遇ふ所の時、遭ふ所の数のごときは、吾又知らざるなり。噫顔子の不幸冉有の斯の疾、尼父常て深く之を歎ぜり。若し其の自ら恨む所を反求せば、則ち吾亦之れあり。定めて此に因るを知らざらんや。吾故人に遇ふ。則ち自ら匿す所なし。吾常て之を記す。南陽の郊外に於いて嘗て一孀婦に私す。其の家窃に之を知り、常に我を害せんとの心あり。孀婦是れより再び合ふを得ず。吾因つて風に乗じて火を縦ち、一家数人尽く之れを焚殺して去る。此れを恨となすのみと。虎又曰はく、使して回るの日、幸ひに道を他郡に取れ、再び此の途に遊ぶなかれ。吾今日尚ほ悟むるも一日都て酔はば則ち君此を過ぐるも、吾既に省せず、将に足下を歯牙の間に砕かんとす。終に士林の笑と成らん。此れ吾が切祝なり。君前み去ること百余歩、小山に上り下視せば尽く見えん。此に将に君をして我を見しめんとす。勇を矜らんと欲するにあらず。君をして見て復た再び此を過ぎざらしめんとなり。則ち吾が故人を待つの薄からざるを知らんと。復た曰はく、君都に還り吾が友人妻子を見るも、慎んで今日の事を言ふなかれ。吾久しく使旆を留め王程を稽滞せんことを恐る。願はくは子と訣れんと。別を叙すること甚だ久し。儕乃ち再拝して馬に上り草茅中を回視し、悲泣聞くに忍びざる所なり。儕亦大いに慟き行くこと数里、嶺に登りて之を看れば、則ち虎林中より躍り出でて咆哮し、巌谷皆震ふ。後南中より回る。乃ち他道を取り復た此に由らず。使を遣はし書及び賻贈の礼を持ち徵が子に訃せしむ。月余にして徵が子號略より京に入り、儕に詣りて先人の柩を求む。儕已むを得ず具に其の伝を疏し、遂に己が俸を以つて均給す。徵が妻子飢凍を免る。儕、後、官兵部侍郎に至る。

資料3

生徒Aの作品

「人虎伝」では、人間だったころの李徴よりも、虎になってからの残虐な李徴の様子や生活ぶりを中心に書いている。しかし、「山月記」では、虎になってからの生々しい話などが省略される代わりに、空費した過去を悲しむという人間らしい行動が新たに追加され、虎の姿になっても人間でいたいと強く思う李徴の気持ちがよく表されている。また、「山月記」では、「家族の面倒を依頼すること」よりも「詩の伝録」を先に書くことによって、詩に執着していた李徴の性格を強調している。

つまり、「山月記」では、虎になってから自らを反省する人間らしい李徴を描くことによって、過ぎ去ってしまったことへの後悔や悲しみを表現している。

資料4

生徒Bの作品

「人虎伝」の李徴は女や食べ物などに執着しているが、「山月記」の李徴は詩や自分のプライドに執着している。つまり、李徴は、「人虎伝」では自分の抱える不満をさらけだすような人物として、「山月記」では自分の抱える不満を自分の中にためてしまう人物として設定されている。どちらの李徴も虎になった原因を自覚している。しかし、虎になってからの行動から見ると、「人虎伝」の方では虎になった事実を受けとめているが、「山月記」の方では、空費された過去を後悔したり人間の心を失うことを恐れていたりして、虎になった事実を受けとめているとはいえない。あらすじなどの設定を変えたことにより、李徴の人物像も変わっていることがはっきりと見える。